

福音の園だより

平成十八年度「高齢者雇用優良事業所協会会長賞」受賞
TOSHINO『メイ』のいきいきキョーキング』取材紹介施設

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定
350・0019 埼玉県川越市木野目一八七八番地一
特定非営利活動法人 福音の園・埼玉 事務局
☎049・230・1111 FAX230・1112

ご家族の声

社会教育運動に人生をささげた父

両親は晩婚で、第一子の私がこの世に生を受けた時、父は四十才、母は三十才でした。第二次世界大戦の直前、当時父は青山の日本青年館の壮年団中央協会に勤務し、青年団を卒業した壮年者達の再教育が仕事でした。一九〇〇年（明治三十三年）宮城県の北部に生まれた父は、慶應義塾大学卒業後、経済の先進国・米国に留学、排日の嵐に直面、祖国の独立歩のため、社会教育運動に身を投じました。

しかし、戦時中の翼賛政治へ注・一国一党的独裁政治に抵抗、職を辞して宮城県に戻りました。敗戦の二年前でした。



武骨で愚直な父でした。父の没後、父の友人が「敗戦で目標を失ってしまった青年達に何か精神的な拠り所を与えたいという切なる願い」の一つが皇居勤労奉仕だったと私に語った。「お父さんは政治的にも世渡りにも一切利用してないだろう」と。誇れる父でした。（〇〇〇〇）

八月十五日「終戦記念日」に寄せて

「奉仕」の原点―皇居勤労奉仕に学ぶ

グループホーム 福音の園・川越 ホーム長 杉澤 卓巳
「奉仕」という言葉を初めて耳にしたのは小学生だった。上京して皇居の中でボランティアの清掃活動を行なった大人の土産話を聞かされたのが最初だった。交通費も宿泊費もすべて自己負担して全くの無報酬の清掃活動に、毎年一万人もの人々が皇居での勤労奉仕を続けている。この皇居勤労奉仕が、いつ、どのような経緯で始まったのか。誕生秘話は次のとおりである。

終戦の年の昭和二十年十一月二十二日、

宮城県から上京してきた二人の人物が宮内省(当時)を訪れた。この二人は、地元で指導的役割を果たしていた。一人は青年団運動のリーダー、鈴木徳一氏四十六才。皇室のことを思いつて荒れた皇居の清掃にあたりたいと願う青年男女がすでに地元には六十名にも及んでいることを告げ、勤労奉仕の許可を求めた。この熱意ある申し出に対して、宮内省総務課長の勇断により、直ちに許可が申し渡された。

「みくに奉仕団」と名乗った六十二名の若者

宮城県栗原郡の若者たちは「みくに奉仕団」と名乗った。男性五十五名、女性七名の計六十二名で、団長の鈴木氏と副団長を除き、ほとんどが二十二、三才の若さだった。終戦の年の年末、十二月八日、六十二名の奉仕団が皇居内に導かれて清掃活動を行なった。奉仕の初日、みなの前に昭和天皇が姿を現された。その後、女官を伴って、香淳皇后もお出ましになった。

「みくに奉仕団」のことが全国に伝わると、我れも我



れもと次々に奉仕団が結成され、勤労奉仕の申し出が宮内省に殺到した。これまでの参加者は、昭和二十年から平成十九年までの累計で約百二十万人にも達していると云う。（詳細は小学館発行『サビオ』二〇〇九年一月十八日号を）覧いただきたい。

天皇、皇后両陛下にお伝えしたいこと

介護サービス事業所管理者として、福音の園・川越の事業運営に専念するうちに芽生えてきた一つの思いを、私は「スタッフ研修・会議」の席上、はばかることなく職員に話してきた。私たちのグループホームを天皇、皇后両陛下に視察来園していただけるようなホームに育てたい。そのため

に事業理念と運営方針を共有して「ケアのプロ」に成長して欲しいと。夢が実現して、両陛下にご視察いただけたならば、十八名の入居利用者をご紹介したい。そして、九十九才になられた〇〇〇〇さんが、「皇居勤労奉仕」誕生の立役者となった〇〇〇〇さんの妻でいらつしやいますとお伝えしたい。戦後六十四年、お元氣なうちに夢が叶いますように。祈り。

ご家族様より

家内の失禁の度合が少しづつ多くなり、介護度が増している状況が週一回の面会の私にもよく分かります。でも、スタッフの方々への心の込めた暖かい介護に家内は護られて穏やかな時間が与えられておりますことにいつも心から感謝しております。同封の金員は家内、J子への定額給付金です。少額ですが福音の園のご奉仕にお使い頂ければ幸いです。二〇〇九年 五月三十一日 O・M

来訪歓迎

いきいきらいふ支援センター・川越様 傾聴ボランティア「くちなし」様

御礼

笹竹(七夕用) 〇〇〇〇様 川越市小中居